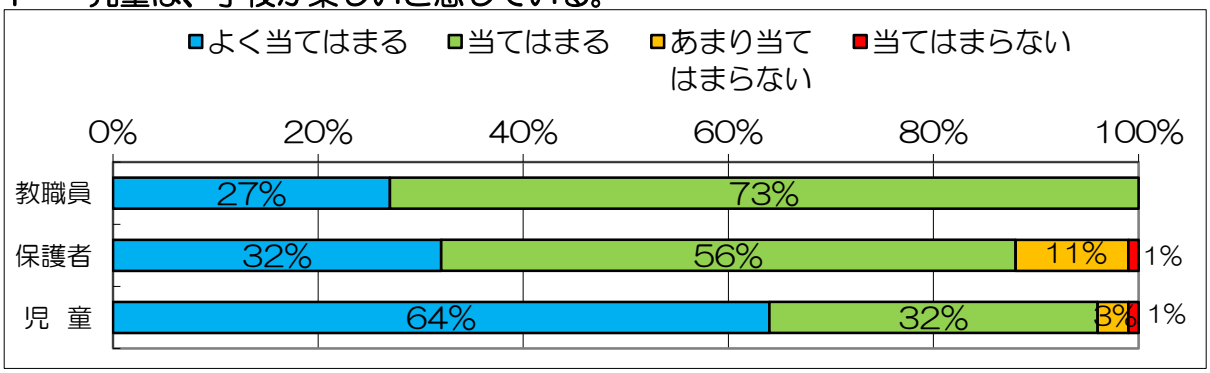
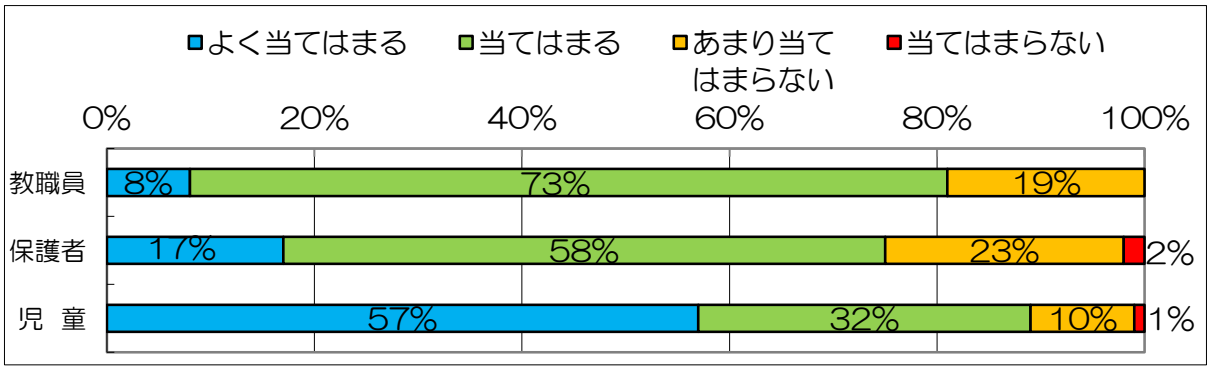
令和６年度 本校教育に関する調査結果について　栃木市立吹上小学校

１　児童は、学校が楽しいと感じている。



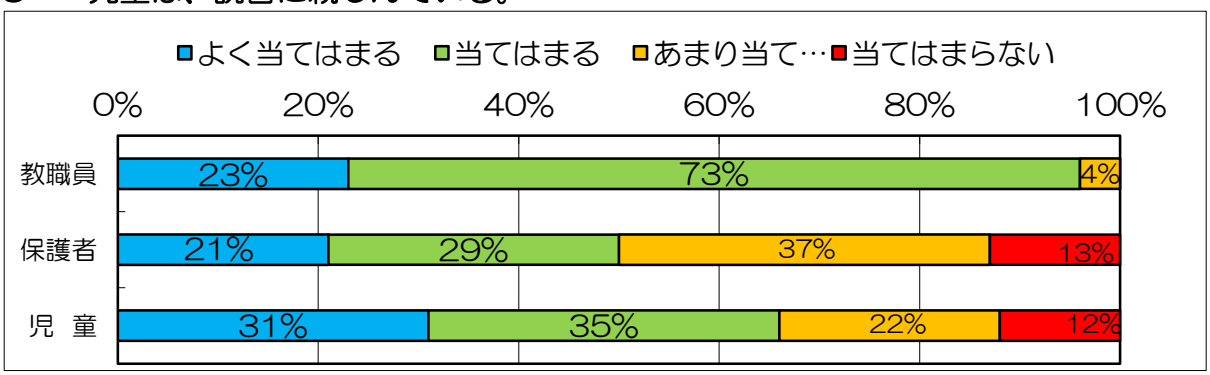
肯定的な回答が、教職員、保護者、児童のすべてで9割を超えている。特に、児童においては7割弱が『よくあてはまる』と回答しており、教職員や保護者の回答を上回っている。しかし、少数ではあるが一部の児童が『あてはまらない』と回答していることから、一人一人に目を向け、児童の変化を見逃さず支援をするとともに、安心して過ごせる学級づくりに力を入れていく必要がある。

２　児童は、学校でも地域でもあいさつをしている。



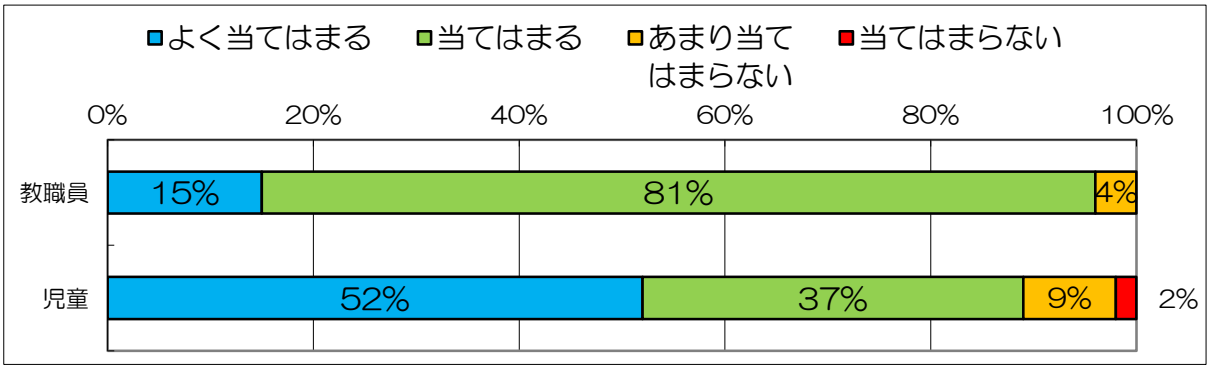
児童のおよそ9割が肯定的な回答をしているが、保護者や教職員は7割から8割であり十分と考えてはいない様子が伺える。児童はよく挨拶をしている・できていると考えているが、充分ではないとの自覚を促し、コミュニケーションとしての挨拶に高めていけるよう今後も保護者と連携し、児童会を中心とした児童主体の活動を工夫しながら指導を継続したい。

３　児童は、読書に親しんでいる。



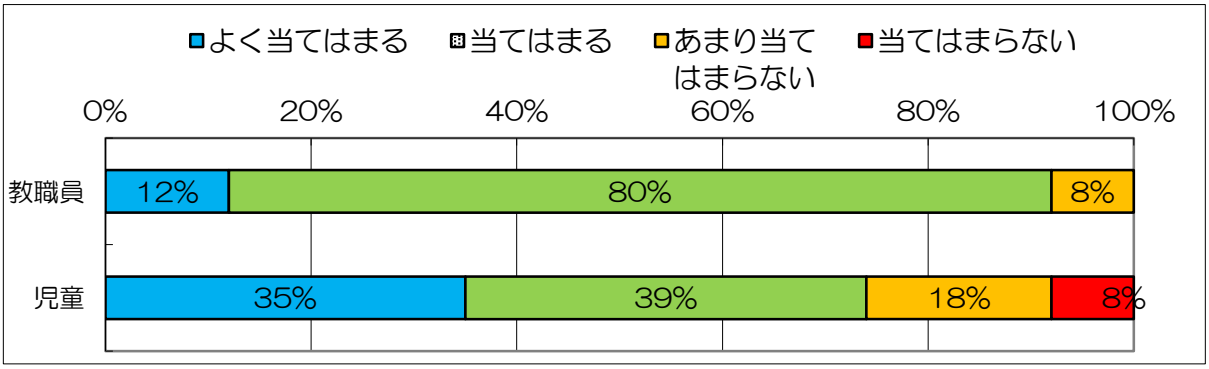
教職員と保護者や児童の回答に差が見られる。学校では読書指導に力を入れており、教職員は成果を感じているが、児童の回答からは、家庭では読書に親しめていないと自覚している子も少なくないこと、保護者の回答からは家庭では十分でない子どもの姿があることが分かる。家庭においては、様々なメディア・ゲームの利用や習い事等もあり意図的に確保しなければ読書の時間はとれない。家庭と連携し、時間をコントロールする力を身に付けることで、家庭でも読書に親しめるよう指導したい。

4　児童は、授業中、先生の話をよく聞いたり、考えたりしている。



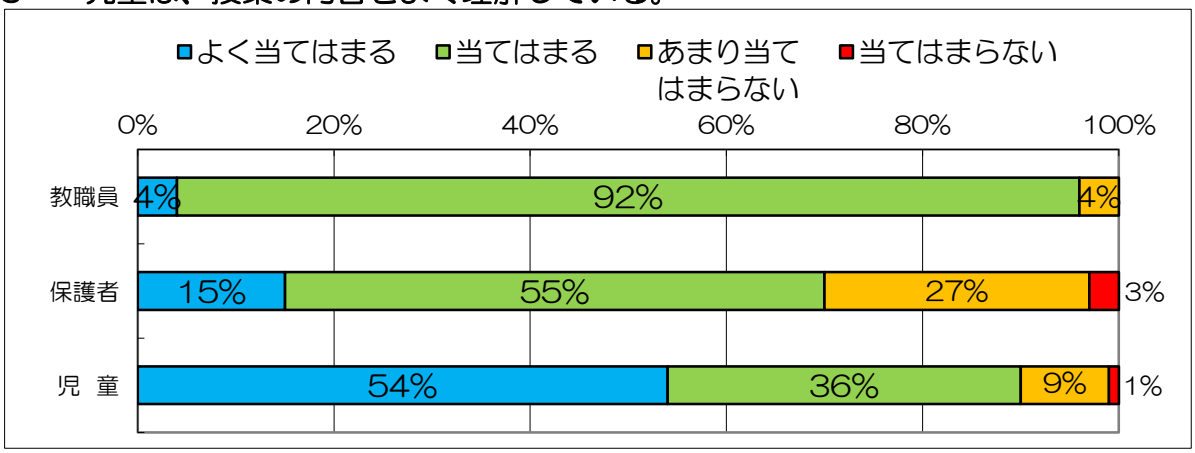
教職員児童共に肯定的な回答が多い。しかし、1割程度の児童が否定的な回答をしている。学校課題研究を中心に据え、安心感のある分かる授業の実践に向けて授業改善を進めるとともに、発達段階に応じた学業指導を充実させる必要がある。教師の傾聴する態度、児童同士で聞き合い伝え合いながら協働的に学ぶ姿勢を意識して、日々の授業に取り組みたい。

5　児童は、授業中、先生や友達に自分の意見や考えを発表している。



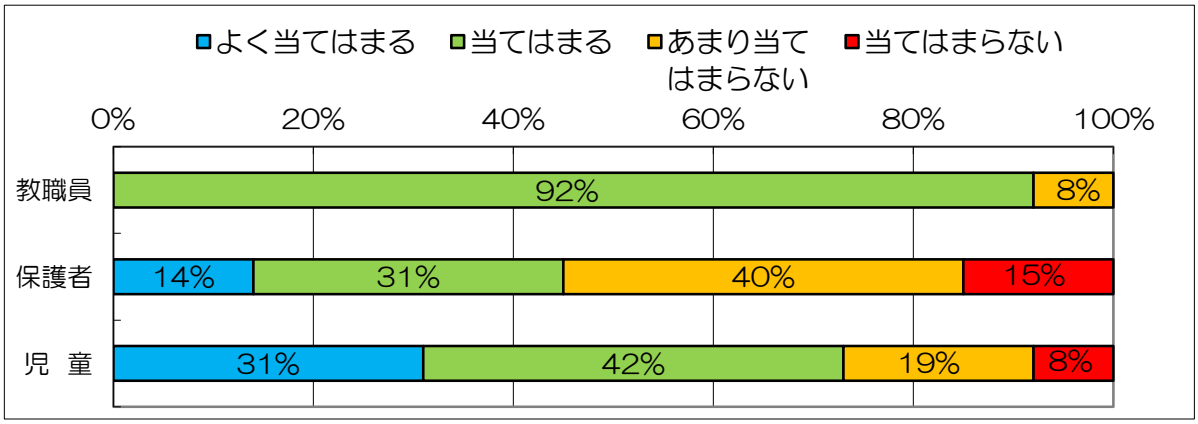
児童の2割以上、教職員の1割が否定的な回答をしており、発表を苦手とする児童が少なくないことが分かる。学校課題研究では学び合う子どもの育成に向けて取り組んでおり、考えをもたせる工夫やペアやグループで伝え合う場面の設定、課題の工夫等の結果、手ごたえは感じられるが、発表に対して消極的な児童も見られる。今後も研究を進め、改善を目指していきたい。

6　児童は、授業の内容をよく理解している。



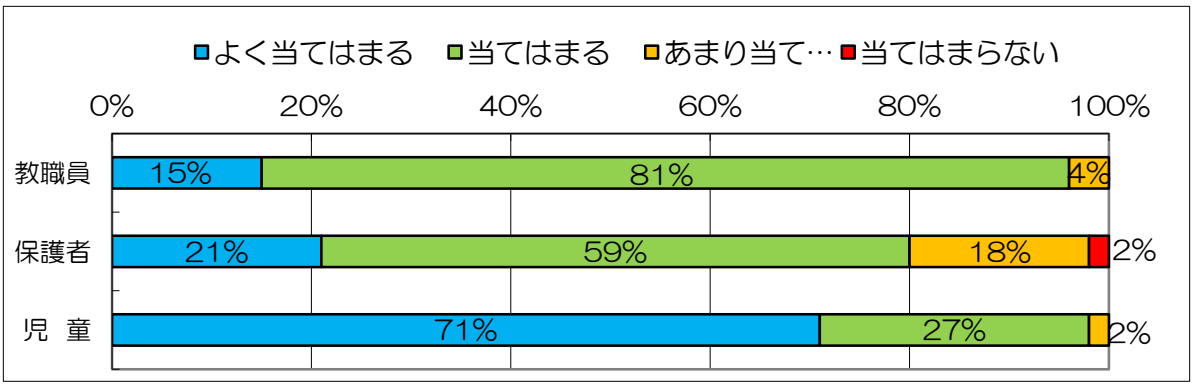
教職員・児童と比較して、保護者の肯定的な回答は3割程度低い結果となった。教職員と児童は授業によってできるようになったと感じているが、定着が不十分で、保護者が家庭で目にする様子は十分でないと感じる場合や、学習への高い関心から厳しい目で観察した結果学力の定着に不安を感じている場合があるものと考えられる。分かる授業づくりとともに習熟の時間を確保やチャレンジタイムの活用、個別の支援を通して学習の内容を定着させ、学力の向上に努めたい。

7　児童は、家庭学習の習慣が身についている。



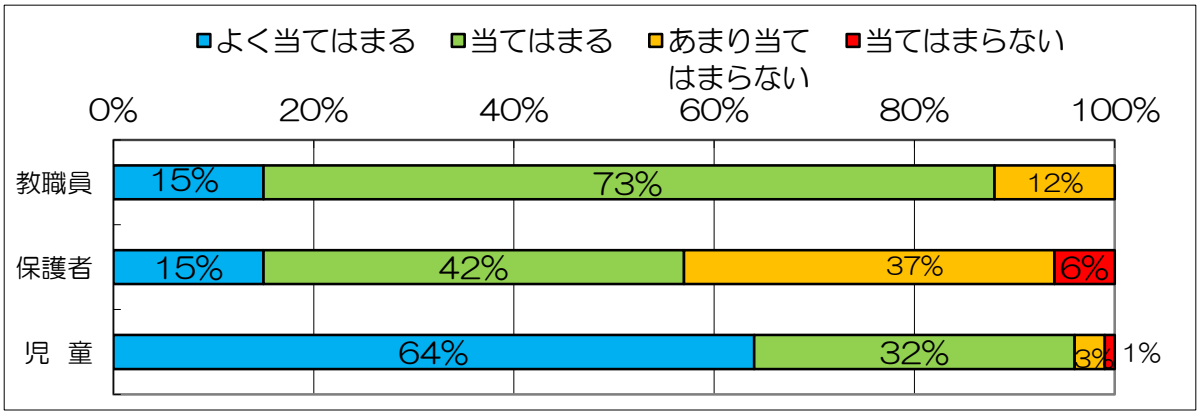
教職員は、『あてはまる』との回答が9割を超えており、宿題や自主学習の提出状況から習慣化されていると感じている。一方、保護者は否定的回答が過半数、児童も3割近くとなっている。このことから、家庭では進んで取り組めていない様子や十分な時間を確保できていない様子が伺える。家庭学習強調週間等の機会を捉えて、家庭学習の手引きを活用しながらその意義や方法について指導したり、意欲のもてる課題を工夫したりすることで自ら取り組めるよう指導する必要がある。また、時間のコントロールも意識させたい。懇談会や面談等の機会を通して保護者と連携して取り組む必要がある。

8　児童は、互いを思いやり、穏やかな気持ちで生活している。



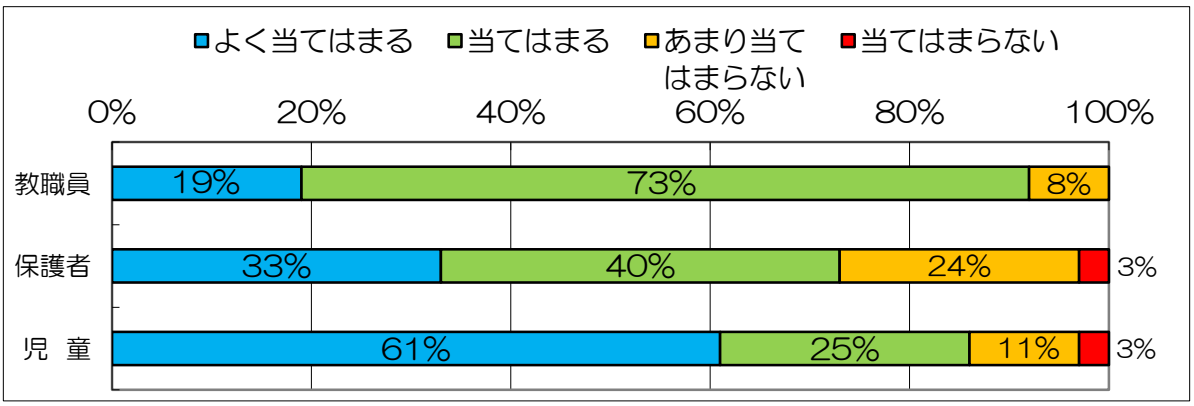
保護者の否定的回答が2割程度と高い。児童の言動を通して、心配な状況を見聞したり、児童の日常生活ぶりから不安をもったりしているものと思われる。学校生活においても、様々な言葉や行動からトラブルとなることもあるのが現状である。児童はだれもが思いやりをもっているが、場面の状況や心の動きによって発揮できないこともある。道徳科や人権教育の充実を図るとともに認め合う学級づくりに力を入れ、様々な人々と関わりを大切にして生活する中で思いやりの心を育てていきたい。

9　児童は、清掃や係の仕事を進んで行っている。



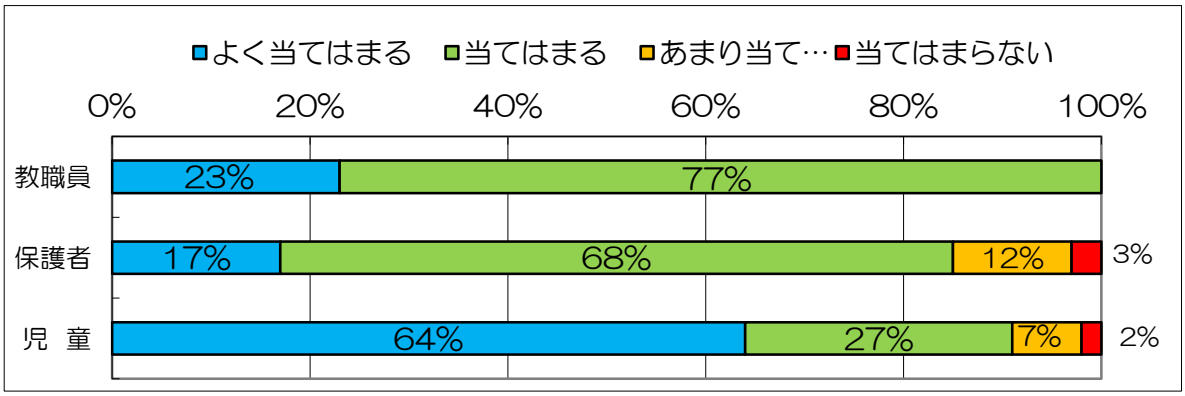
教職員、児童は否定的回答が1割程度なのに対して、保護者は4割を超えており、差が大きい。学校では清掃や係の仕事によく取り組んでいるが、家庭では十分にできていない、あるいは、進んではできていない様子が伺える。学校の活動で働くことの喜びを感じ取らせて自己有用感を高め、家庭での積極的な取組につなげたい。そのために、発達段階に応じた家庭での役割をもたせること、家族の一員としての自己有用感をもたせることの大切さを共通理解し、家庭との連携を図りたい。

10　児童は、進んで運動し、体力づくりをしている。



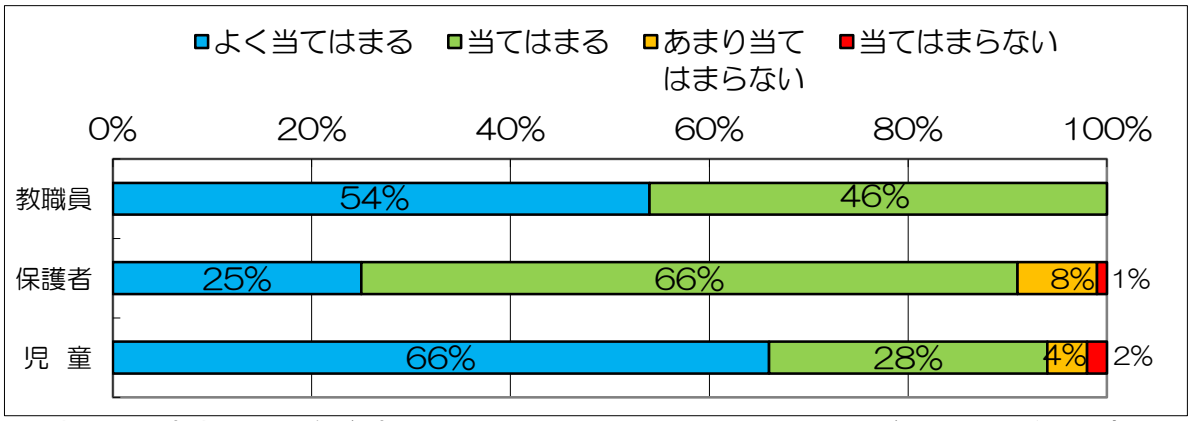
保護者の否定的回答が3割近くとなり、比較的高い結果であった。学校ではどの児童も体育を中心に運動する機会があるが、家庭では、スポーツクラブ等に入っている児童と入っていない児童で差が生まれ、二極化が進んでいるものと考えられる。体育を中心に学校教育全体で体を動かす楽しさを重視した指導に取り組み生涯スポーツにつなげるとともに、自分に合った目標をもたせながら継続して運動に取り組み体力の向上が図れるよう、指導を工夫していきたい。

11　楽しさを実感できる授業、分かる授業を工夫し学力の向上に努めている。



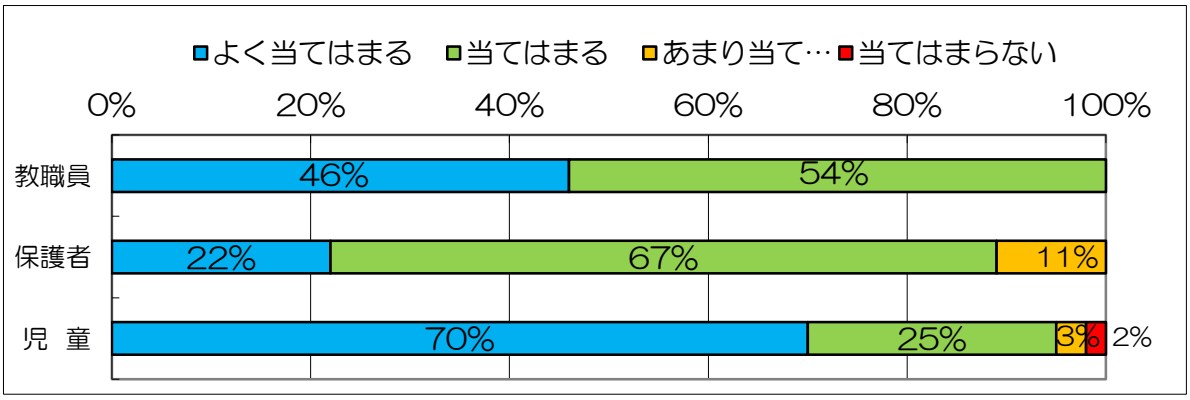
三者とも肯定的回答が8割を超えているが、保護者、児童の否定的回答が1割前後見られ、課題が残る。わかる授業の実践に向けた教師の工夫がすべての児童に実感として伝わるように、日々授業力向上に努めなければならない。日常の学びや各種学習調査結果をもとに児童の実態を適切に把握し、ICTも活用しながら個に応じた指導の充実、協働的な学習の充実を図ることで、学習意欲と学力の向

12　児童相互のトラブルや悩みなどに誠意をもって対応している。
（一人一人を生かした学級経営を行っている。）



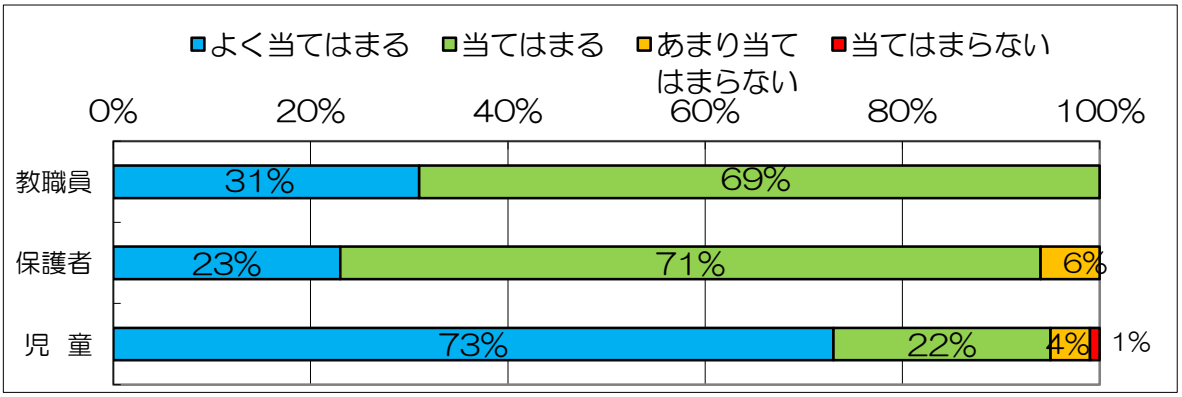
三者すべて肯定的な回答が9割を超えており、おおむね行き届いた対応ができているものと考えられる。しかし、一部否定的な回答が見られることから、今後も児童一人一人の悩みやトラブルに対して誠意をもって対応していきたい。機会を逃さず対応するとともに、保護者はもちろんスクールカウンセラー等とも連携し、指導・支援に取り組んでいきたい。

13　安全教育を充実し、安全の意識や態度を育てている。



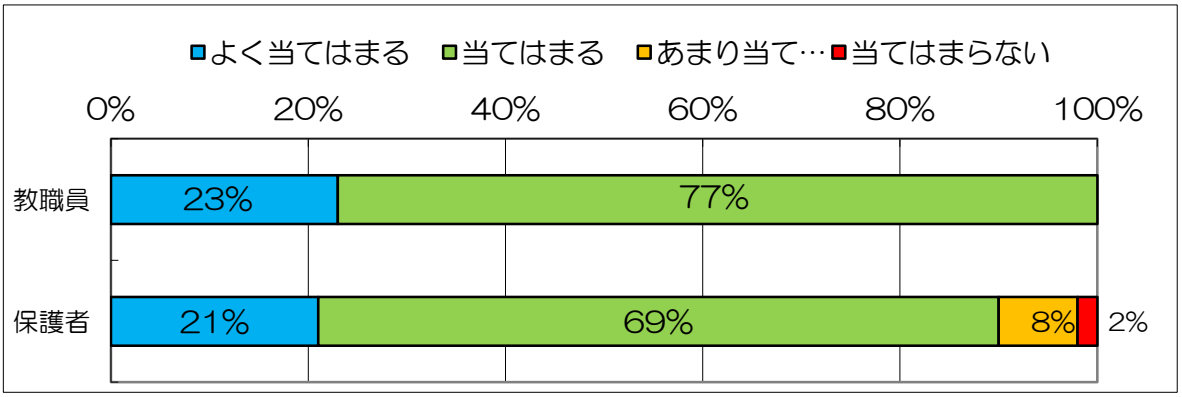
三者すべて肯定的な回答が9割程度となっており、過去の防災教育推進研究の成果を継続した避難訓練等の実施により、災害安全への意識が定着している結果と考えられる。しかし、生活安全、交通安全の面では、防犯教室や交通安全教室の取組、学級活動等での指導により成果は見られるが、登下校や休み時間等では意識が低下している場面も見られる。学んだ知識や経験を、実生活に生かせるよう指導したい。

14　食育に積極的に取り組み、児童の食への関心や感謝の気持ちが高まった。



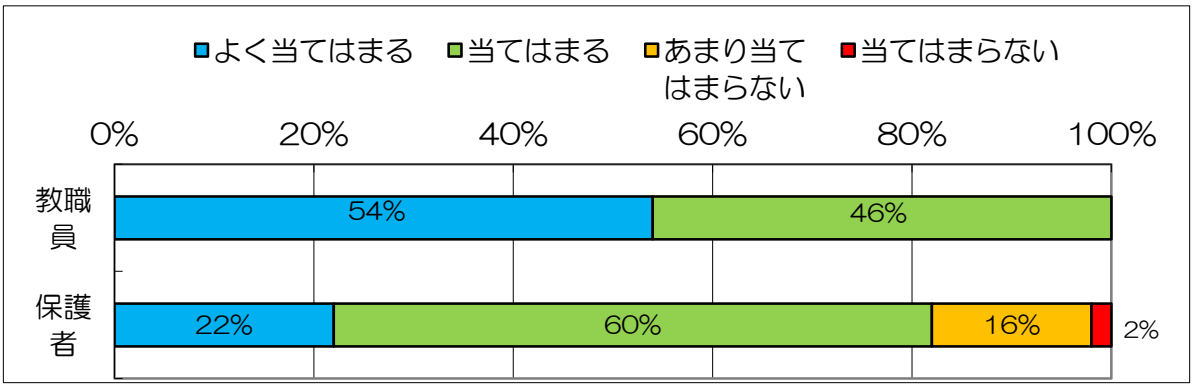
三者すべて肯定的な回答が9割以上となっている。生活科等での栽培活動、学校栄養職員による給食時の放送や学級活動での栄養指導、給食委員会児童を中心とした給食週間の取組等によって、食への関心や感謝の気持ちを高めているものと考えられる。調理場があるという利点も生かして、保護者との連携を図って引き続き食育の推進を図りたい。

15　学校の教育方針や取り組みを各便りや懇談等で分かりやすく伝えている。



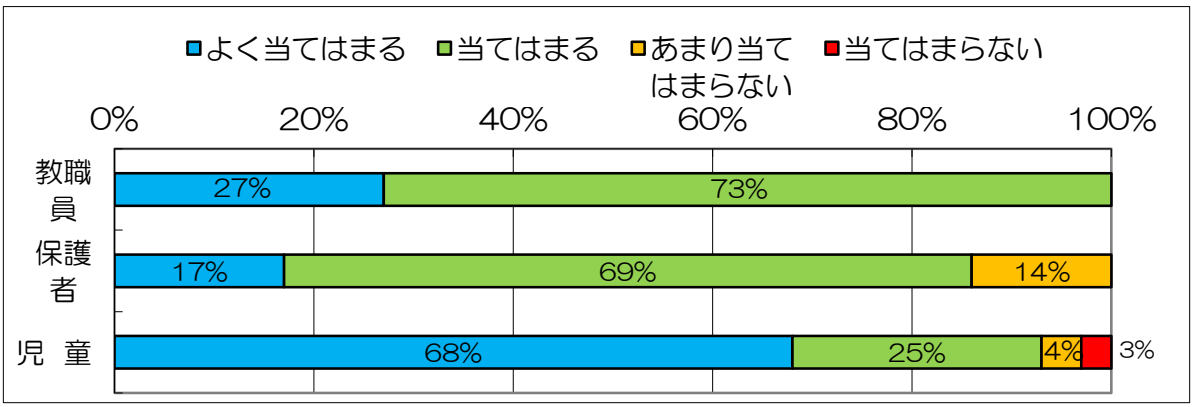
保護者、教職員ともに9割以上が肯定的に回答している。各種たよりやホームページでの情報公開を積極的に進めるとともに、懇談会や面談の機会を設定してきた成果と考えられる。しかし、少数ではあるが保護者に否定的回答も見られる。対面での説明の機会が少なくなる中、現在実施している情報発信や懇談会等の内容・方法を改善し、学校理解を深めるようにしたい。

16　学校行事やファミリー参観、授業参観など年間を通して適切に計画され、実践されている。



保護者に否定的回答が2割程度見られる。運動会等の行事や授業参観、PTA活動等、保護者が参加する事柄の実施時期や内容、来校の手段等に負担を感じているものと考えられる。これまでも、保護者が来校する行事等の実施については、実施時期の分散や短時間での実施に努めてきた。今後も年間を見通しての計画や早めの周知を行い、より多くの保護者が参加できるよう工夫していきたい。

17　地域の教育力を生かして、ふるさとを愛する心を育てている。



全体的に肯定的回答が多い。各学年で地域の方々から様々な形で協力を得て学習を進めたり、アシストネットのボランティアの力をお貸しいただいたりすることが定着しており、地域を愛する心が育まれているものと考えられる。今後も、生活科や総合的な学習の時間での地域を題材とした学習の充実、各教科での地域教材・地域人材の活用を進めていきたい。その際は、地域ボランティアの方々をはじめ、吹上まちづくり協議会や吹上公民館の協力も得ながらふるさとを愛する心を育てていきたい。